

# 北朝鮮の軍事力（通常戦力）をどう見るか —北朝鮮による恫喝の裏側は—

2013年5月

西村金一

## はじめに

北朝鮮はこの3月5日、「休戦協定を白紙化する」との声明を出し、第2朝鮮戦争を引き起こすかのように恫喝した。北朝鮮が現実的に恫喝していることが、「恫喝だけなのか」、「実際に実行しようとしているのか」、「軍事的に何ができるのか（具体的軍事作戦）」、「生起するとしたらどのような戦闘様相になるのか」を考察し、「北朝鮮は現実的に戦争に踏み切ることができるのか（勝ち目があると思っているのか、無謀なことなのか）」を判断することが必要である。

そのために、まず、韓国軍との「数量的な戦力（兵力）」を比較し、北朝鮮の軍事力を客観的に分析する。軍事作戦上から保有する兵器が異なることや北朝鮮の兵器が旧式であることから一概に表すことは難しいが、数量的に評価することが重要である。

次に、「数量的な戦力比較」を踏まえて、次に、部隊の配備、兵器の開発状況、兵器の新旧、兵器の性能・諸元、過去の挑発行為、戦略・戦術的妥当性などの各種要素から「北朝鮮が保有する軍事力の狙い」、「南北間で戦えば戦闘様相はどうなるのか」を考察する。

そうすることによって、「北朝鮮に勝ち目があるか、あるいは無謀なことなのか」、そして「交渉を狙った恫喝なのか、実行に移すことを恐れない恫喝なのか」が必然的に判明してくる。

## 1 数量的な戦力比較

陸海空軍の主な戦闘力においては、地上軍では兵員・戦車・火砲の数、海軍では大型・小型の艦艇および潜水艦の数、空軍では戦闘機・対地攻撃機・爆撃機の数と比較する。

韓国軍を1とした場合の北朝鮮軍は、地上軍では1.8倍、海軍では2.2倍、空軍では1.8倍であり、トータル的には1.9倍である。攻撃して成功する戦力比は3倍以上必要であるとされる。北朝鮮軍は、韓国軍の1.9倍の戦力であることから、勝利することは難しいが、防御は比較的容易である。

海軍・空軍の戦闘では、近代兵器が戦闘の勝敗を大きく左右する。海空軍の近代兵器を抜粋して数的戦力を比べるには、海軍では'80年代以降に建造された主要戦闘艦艇、空軍では第3世代・第4世代の戦闘機数を比較する。北朝鮮海軍近代兵器1に対し韓国は47倍、北朝鮮空軍近代兵器1に対し韓国は5.4倍である。単純に数量を比較すると北朝鮮がやや優勢の約1.8倍であるが、近代兵器のみを比較すると反対に韓国が約5.4~47倍と圧倒的な差がつく。この戦力差は、北朝鮮が局地的・奇襲的に作戦をした場合には成功する可能性があるが、作戦全般でみると、海空軍では圧倒的に韓国が優勢であることを示す。

更に、在韓米軍、太平洋米軍などの増強戦力を加えると、圧倒的な差が生じる。つまり、北朝鮮軍は、北朝鮮が見えないところ、手が届かないところから、米韓軍の大量の精密誘導兵器で北朝鮮軍を叩くことができるということだ。

## 2 北朝鮮が保有する軍事力の狙い

北朝鮮は近年、劣勢な軍事力を挽回し、奇襲攻撃を成功させ、あるいは防勢作戦を可能にするために、以下の各種作戦戦術を徹底的に検討し考案している。

①地上軍は、境界線で定められた地域を担当する歩兵主体の8個軍団と装甲車や戦車により攻撃や防御時の機動打撃の役割を果たす「4個機械化軍団」・「1個戦車軍団」、火砲の射撃により敵部隊を制圧する「1個砲兵軍団」を保有している。

②韓国に接する地域に配備されている前方軍団（4個）は、韓国に侵攻する場合、作戦当初に DMZ を越えて攻撃し、韓国軍の第一線防衛陣地を突破することを目的としている。防勢作戦の場合は、米韓軍の攻撃を陣地防御により阻止することを狙っている。

北朝鮮空軍兵器は旧式老朽化し、航空劣勢が予想されることから、地上軍は、丘陵の地中に坑道を掘って陣地構築し、爆撃によっても被害を受けにくいようにしている。

北朝鮮軍は、圧倒的に有利な戦力を有する米韓軍に対して、攻勢作戦と防勢作戦の両方の作戦ができるように配備してはいるが、戦力比較を見ても、坑道陣地を形成していることから、米韓軍の攻撃から防御することに力を入れているとみてよい。

③攻勢作戦に出る場合は、攻撃前に10～12万人の特殊部隊が韓国国内に潜入する。そして、韓国の重要施設を破壊し要人を暗殺することなどで、国内を混乱させ、それが十分に成功した場合にのみ、前述した前方軍団が DMZ を越えて攻撃するとみてよい。特殊部隊は、韓国内の飛行場付近に潜入し、離着陸する米韓作戦機を携帯対空ミサイルで撃破することを狙っている。

攻撃時の航空劣勢を補うために、ロシアから導入した約6,000基携帯対空ミサイルを使用するのが当然だ。

④韓国が最も困るのは、ソウルが北朝鮮軍火砲の射程内に入っていることだ。砲兵軍団が保有する170mm自走砲（射程54km）および地対地ロケット「フログ7」（射程60～70km）はソウル市街まで、240mm多連装砲（射程43km）はソウル市街付近まで射撃する能力がある。米韓軍の反撃を受けるまでに、多連装旅団が各門18発を3回射撃すれば約3000発、170mm自走砲旅団が各門60発射撃すれば約3200発以上の火砲の弾丸を、地対地ロケット「フログ」64基が3回射撃すれば、約200発のロケットを発射できるものと考えられる。

10分以内に米韓軍による精密誘導兵器などの反撃が行われれば、1／3の2000発程度の数に減らすことができ、砲やロケット発射機とその陣地は数日の内に破壊されることになる。

⑤空母を含む米艦隊に対抗するために長射程の艦対艦ミサイルを開発し、それらを多数の小型戦闘艦艇に搭載し、海上から接近して多数隻の艦で1隻の大型艦を狙うゲリラ的攻

撃を行う。小型潜水艦や特殊潜行艇でも、接近し魚雷を発射して撃破する。多くの犠牲を払ってでも数隻の大型米艦艇を撃破することを狙うとみてよい。

⑥北朝鮮が保有する大口徑の火砲、対地ロケットのフロッグ、弾道ミサイルのスカッド、ノドン、ムスダン、テポドンが化学剤を搭載している。特殊部隊は、地下鉄サリン事件と同様の方法で、化学剤を散布するなどの化学テロ攻撃を実施するものと考えられる。

## おわりに

戦力的に遥かに劣勢な北朝鮮軍は、圧倒的に優勢な米韓軍に対し防勢作戦を念頭に置いている。

だが、米韓軍の近代的な戦力も、極めて稀に局地的に奇襲を受けて、僅かな被害を受けることも予想される。北朝鮮特殊部隊が隠密に潜入して特殊作戦を実施すれば、一時的あるいは特定の期間だけは、米韓軍に打撃を与えることができる。また、韓国の主要都市の重要施設へのテロや砲撃・ロケット攻撃により、韓国の主要都市を破壊することができる。北朝鮮軍は、以上のような劣勢を勝機に変える奇襲戦法を工夫して採用している。可能性は低いが、これらの作戦が米韓を混乱させることができれば、地上軍が坑道の中から出てきて攻勢作戦を実施することもある。

とはいえ、前述の奇襲戦法は一時的、局地的に成功する可能性はあるが、戦争の帰趨を大きく変えるまでは至らない。北朝鮮の奇襲戦法が効果を発揮できる前に、米韓軍の作戦機・艦艇などから発射される精密誘導兵器や地上軍の火砲により、北朝鮮の首都である平壤、軍の陣地、弾道ミサイル部隊の発射基地は、破壊し尽くされてしまうであろう。そうなれば、北朝鮮国内で今まで抑圧されていた人民が、軍人と一緒になり暴動を起こす可能性もある。

米軍を加えて南北が戦えば、北朝鮮に勝ち目はない。北朝鮮は、通常兵力での「無謀な脅し」をしているに過ぎない。それでも北朝鮮は、戦力的に圧倒的に優勢な米韓日を恫喝している。戦争を起こしたくない我々国民が、負ける戦争も辞さない覚悟の暴力国家に恫喝されているのが現状なのだ。

(セキュリティ研究 2013 年 5 月号に掲載)